

『七帝柔道記』（増田俊也著）を再読してみた。

二浪して北海道大学へ入学した。寝技中心の七帝柔道を経験するために入学するときから2年留年すること（普通に進級すると水産学部なので函館に行かなければならなくなる）を決めているので、授業には出ない。ホッキョクグマの生態研究者を志していたため、柔道部の他に北大ヒグマ研究グループにも入りたかったが、柔道部と両立できずに断念した。2012年、『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』で第43回大宅壮一ノンフィクション賞、第11回新潮ドキュメント賞をダブル受賞した。再読の予定である。

連日、授業に出ないで寝技の稽古。部費を稼ぐために、学園祭での焼きそば屋（中国4千年の歴史、焼きそば研究会）。カンノヨウセイという新入生をだます恒例の意味不明の会。著者が初めて臨む七帝戦、翌年の七帝戦について600ページに亘って綴っている。私は先日、自治医科大学空手道部の50周年記念誌に寄せ書きをしたが、400字も書けなかった。報われずとも青春に全体力を注ぎこんで生きる姿が感動を呼ぶ。私の高校三年間は、空手、応援団、勉学だけで、下宿と高校を下駄履きで自転車を使って往復する日々であった。

『北の海（上）（下）』（井上靖著）も読んでみた。井上靖は、私の母校沼津東高等学校出身である。沼津の街の様子が出てきて、懐かしい。練習量がすべてを決定する柔道、すなわち寝技。というと、この『北の海』が嚆矢のようだ。ここでも勉学そっちのけで寝技柔道に青春を賭ける男たちが出てくる。男たちの人間関係とのんびりとしたこの時代が羨ましくなる。